

Title	李致萬「一九八〇年代における南北統一運動のための日本教会の役目と寄与」へのコメント
Author(s)	東野, 尚志
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.55 別冊, 2013.3 : 40-46
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=5002
Rights	


 The logo for SERVE consists of the letters S, E, R, and E in a serif font. The letter 'V' is replaced by a stylized checkmark symbol. The letter 'I' is replaced by a square symbol.

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

李致萬 「一九八〇年代における南北統一運動のための

日本教会の役目と寄与」へのコメント

東野尚志

李致萬教授が、第二次世界大戦以後、韓国のキリスト教会が経験された困難と痛みに満ちた複雑な歩みについて、特に、南北に分断された民族の統一運動という視点から光を当てて、世界の教会および隣国日本の教会との関わりの中でその姿を描き出してくださったことに、感謝を表したいと思う。私自身、この論文を通して、歴史的な出来事について、多くのことを学ばせていただいた。そこで、このコメントにおいては、まず、論文の概要と論点をまとめた上で、所感を述べることにする。

I. 論文の概要と論点

「はじめに」において、李教授は、韓国のキリスト教会が、正義と平和の福音を実践する宣教的課題として、朝鮮半島の南北分断を乗り越えて民族が大同団結するために力を尽くしてきたことを示し、その過程で、世界の教会がどのよ

うな関わりを持ち、とりわけ、日本の教会がどのような役割を果たしたかということについて、一九八〇年代を中心に考察することを論文の目的として掲げる。

「1. 解放以後、日韓キリスト教関係の足跡」において、李教授は、「日韓基本条約（一九六五・六・二三）」調印による日韓国交正常化と前後して始まった日韓のキリスト教会の交流の足跡をたどっていく。両教会の人的交流が進む中、日本のキリスト教界において、韓国に対する謝罪と和解を通して交流の回復を望む動きが起った。その結果として、一九六五年九月、当時の日本基督教団総会議長大村勇牧師が、「韓国基督教長老会」の第五〇回総会にオブザーバーとして参加し、総会席上で、謝罪の言葉を述べたことが、日韓両国のキリスト教の成熟した関係の出発点になったと見る。

さらに、一九六七年九月、日本基督教団総会議長大村正久牧師が、「韓国基督教長老会」総会と「大韓イエス教長老会（統合）」総会に参加したこと、また翌年には韓国の三教会と日本基督教団との「宣教協約」が結ばれたことを、両国教会の協力関係の新しい第一歩として評価する。特に、日韓キリスト教交流関係の急進展の象徴として、一九六七年、日本基督教団総会議長大村正久の名義で公にされた「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白（戦責告白）」に注目し、同戦責告白や同じ年に結成された「韓国堤岩教会焚殺事件謝罪委員会」が、日本のキリスト者に対して、韓国と韓国教会に謝罪の姿勢を促す契機になったことを評価する。

「2. 南北キリスト教徒の出会いと日本キリスト教」において、李教授は、歴史的に分断された南北キリスト教徒が、国際社会との関わりの中でどのように統一を志向し、日本のキリスト教がどのような役割を担ったかを検証する。一九七九年の軍事クーデターと一九八〇年の光州民主化運動鎮圧は、国際社会が韓国の人権問題に関心を持つ契機と

なった。統一議論や統一問題研究さえも封鎖されてしまう国内事情の中、韓国キリスト教は世界教会および在外韓国人教会との連帯を通じて、反人権・反民主的な韓国の状況の核心であり、世界平和に脅威を与える原因が朝鮮半島の分断にあることを認識して、これを解消するために努力することを確認した。特に、韓国キリスト教が世界教会との連帯を通じて統一運動の方向性を具体化する契機となった会議として、「北東アジアの平和と定義に関する協議会（東山荘協議会一九八四年）」に注目する。この協議会には、北朝鮮教会と中国教会は不参加であったが、韓国キリスト教統一運動の方向設定に少なからぬ影響を及ぼしたとする。

しかし、日韓基本条約によって韓国政府だけを朝鮮半島で唯一の政府と認定し、北朝鮮政府を無視ないし敵視する日本において、日本キリスト教もまた、北朝鮮に対する日本社会の偏見から自由ではなかったと指摘する。

日本キリスト教は、朝鮮半島の平和統一のために、北朝鮮キリスト教および北朝鮮を国際社会の孤立から抜け出すようにし、平和統一に友好的な周辺情勢を形成する方向で進むことを求めてきたが、分断の直接、間接の当事国である米国と日本が、北東アジアでの有事に備えて軍備増強と軍事協力を持続してきたことは、大きな障害となることは明らかであると述べる。

「3. 分断問題に対する日本キリスト教徒の認識とその意義」において、李教授は、日本キリスト教が、朝鮮半島統一運動において、世界教会の一員として歩調を合わせてきたことを認めつつ、分断問題に対する日本のキリスト者の認識について論じる。そもそも、朝鮮半島の分断は、日本の朝鮮侵略と植民地支配に原因があることを指摘する日本のキリスト者の言葉を多数引用する。韓国キリスト教の分断問題に対する支配的な見解が、北朝鮮の「南への侵略」の責任を問う「反共」に帰結することについて、画一的な枠組みで捉えることの不十分さを指摘し、この問題を日本の責任また罪責とする日本のキリスト者の告白的認識を評価する。ただし、日本の政界と日本社会一般が、北朝鮮に対する極端

な偏見にとらわれていることも事実とする。

韓国キリスト教は統一問題においてだけでなく、他の問題にも同じように保守と進歩が排他的に対立してきたことを指摘し、その理由を均衡的な神学的立場が不在であったためとする。保守と進歩、韓国と北朝鮮を合わせられる中道的、均衡的、また実践的な神学の領域を拡大する必要に言及する。

「おわりに」で、以上の論点をまとめ、整理している。

II. 所感

本論文においては、日本のキリスト教徒の認識について、日本基督教団の戦争責任告白（いわゆる「戦責告白」）から始まり、朝鮮半島の南北分断問題に対する日本のキリスト者の責任告白を高く評価している。確かに、韓国と日本の歴史的な関わりを振り返るとき、日本という国と日本の教会の過去の罪責の告白と悔い改めを迫られる。しかしまた同時に、日本のキリスト教会の中で、「戦責告白」がどのような位置を占め、どのような働きをしたか、ということについても、歴史的な検証が必要になる。その意味で、日本のキリスト教会、特に、日本基督教団に身を置く者としては、日本のキリスト教に対する李教授の評価には、違和感をぬぐえない。もちろん、それは、日本のキリスト教会内部の問題であるが、一九六九年以降、大学紛争は、神学校にも飛び火し、以来四〇年にわたって日本基督教団を大きな混乱の渦に巻き込んだのである。

「教団紛争」と呼ばれる混乱の中で、信仰告白よりも戦責告白を重んじ、教会の聖性を否定して、福音伝道よりも社

会活動を重んじる人たちによつて、日本基督教団の教会の伝道は大きく衰退してしまった。伝道による教勢拡大を求めるのは、植民地主義と同じだという一方的な認識によつて、キリストの大伝道命令が無視され、キリストの教会であるよりも、世のための教会であることを優先する誤りに陥つたのである。教会が、いわゆる「教会派」と「社会派」に分かれて対立したことは、教団にとつてまことに不幸な歴史であつたと思う。それによつて、教会形成と社会活動が分断され、真に福音に根ざした、救いの証しとしての教會的な社会活動が正しく位置づけられなくなつてしまった。そういう「教団紛争」の中で、「戦責告白」が、ある役割を担つたという事実を、韓国のキリスト教会の方たちにも理解していただきたいと思うのである。

そもそも、李教授が対話の相手として言及された日本基督教団という教会は、一九四一年、戦時体制のもとでの宗教統制によつて諸教派・教会が合同して誕生した教会である。しかし、そこに神の摂理的な導きを信じたがゆえに、戦後になつても解散することなく、合同教会としての歩みを続けて今日にまで至る。ただし、合同前の教派的な信仰と職制が明確な教会や、合同教会のあり方に賛同できなかった教会は、戦後、次々に離脱をしいつた。そのような厳しい現実に直面しながら、さまざまな教派的な背景を持つ諸教会の合同教会として、教団の信仰的なアイデンティティを明確にするために、一九五四年、日本基督教団の信仰告白を制定したのである。ところが、一九六〇年代の後半から、体制に反対し、暴力をもつて変革しようとする波が押し寄せて、上述のように、日本基督教団は大きな混乱と紛争の中に巻き込まれていつた。東京神学大学がバリケード封鎖を解くために機動隊を導入したのは国家権力を利用して学生を売り渡したことで、一九七〇年の大阪万国博覧会にキリスト教館を出展するのは資本主義のお祭りに教会が賛同すること、結婚式の式文で読まれるエペソ人への手紙（エフェソの信徒への手紙）第四章は女性差別……。そういう主張をもつて、暴力をも辞さない破壊的な力が教会に襲いかかつたのである。

一九六七年に、教団総会議長の名前で公にされた「戦責告白」は、この告白がアジアの諸教会に対して与えた印象とは裏腹に、日本基督教団の内部においては、マルクス主義的社会理論に基づく社会活動グループの旗印として用いられ、いわゆる「戦責告白路線」を生み出すことになった。それによって、神とつながる信仰的な垂直次元と社会倫理を推進する水平次元は分断され、聖書の福音に生きる証しとしての社会活動は、革命理論によって場所を奪われてしまったのである。一九五四年に制定された「信仰告白」は、単なる作文で中身がない。「戦責告白」こそが、真実の言葉、教会の告白だ、と主張する人たちは、信仰の共同体である教会を、社会活動の拠点、革命の拠点へと解体しようとして、教会の中に大きな混乱を巻き起こした。

対外的に、とりわけ周辺諸国の教会に対しては、日本基督教団は、「戦責告白」をして、戦争中の教会の罪の告白と悔い改めを明確にした教会として評価を受けており、李教授もその点を高く評価しておられる。しかし、「戦責告白」が日本基督教団内部において果たした役割は、和解の道を拓くよりは対立を生み出し、神とつながる垂直次元を括弧に入れて、水平次元にのみ関心を向けさせ、教会の世俗化を進める路線につながったのである。そして、現在もなお、教会の信仰告白をないがしろにし、洗礼と聖餐という聖礼典をも、キリストと結ばれる信仰の奥義ではなく、単なる個人の決意表明と交わりのしるしに過ぎないものへと変質させる力が、日本基督教団の教会をむしばんでいる。そういう中で、今ようやく、「教会派」と「社会派」の対立軸を乗り越え、伝道する教会の再建のため、日本基督教団は大きく舵を切ろうとしている。前総会議長山北宣久牧師は、教団紛争の混乱を「荒野の四〇年」として回顧し、その間に破壊され、失われた教会的な命を回復することを訴えた。そして、現総会議長石橋秀雄牧師は、「伝道に熱く燃える教団」の形成を目標として掲げているのである。

従来、日本の教会と韓国の教会の出会いと関わりが、日本の側としては非常に偏った形で育まれてきたことを、とて

も残念に思う。今こそ、それぞれの国の歴史的な課題、それぞれの教会の歴史的な歩みを踏まえて、新たな出会いをす
るべきときではないかと思う。その意味で、李致萬教授の論文を通して、韓国のキリスト教会が深い痛みと苦痛の中で
直面してこられた南北分断の歴史と日本のキリスト教会の関わりについて学ぶ機会が与えられたことを感謝したい。そ
こから示された日本基督教団の課題を受け止めつつ、韓国のキリスト教会と日本のキリスト教会の新たな交わりの歴史
を拓いていきたいと願う。